

高尾山報

令和4年7月号

日の出を拝し回峰行を行う 於・信徒峰中修行会



当山貫首と不動院にて面会された亀谷猥下

真言宗善通寺派 大本山隨心院第四十四世門跡 亀谷英央猥下御来臨

六月二十二日、真言宗善通寺派大本山隨心院第四十四世門跡亀谷英央猥下が、中本義久寺務長と共に初夏の高尾山に来山されました。先代の隨心院第四十三世門跡龜谷曉英猥下が本年四月に遷化され、六月七日に行われた本山葬に、佐藤貫首が随喜した御礼で高尾山を訪れ、以前に先代の四十三世龜谷門跡が、大山前貫首と面会された山麓の不動院にて、和やかに歓談されました。

「行来坐臥」とは、「行住坐臥」と同じように、行ったり来たり、座ったり横になったりといった日常の動作を表します。困っている人に対して、いつも通りの生活を送れるように部屋や軒先を貸したり、雨露を凌いで休めるような場を提供することが求められています。「宿一飯」(一夜の宿と一回の食事を与えられること)という言葉があります。四国八十八箇所を巡るお遍路さんに、食事や宿を用意したりする風習を「御接待」と言いますが、そうした心づくしのお持てなしも、現代に生きる「房舎施」の布施行と言えるでしょう。ただ、旅の僧侶であっても、すんなりと泊めてくれない場合もあったようです。

平安時代の終わり頃のお話。西行法師(一一八〇〜一一九〇)が、四天王寺(大阪市天王寺区にある和宗総本山)に参詣した時のこと。途中で大雨が降ってきたので、江口(大阪市東淀川区)に住む遊女妙のところまで宿を借りようとした。すると妙は承知しない素振り。「そのような出家者の方をここにはお泊めできません」と言ったので、西行は次のような歌を書き付けて出て行ったのでした。

厭ふまでこそ 難からぬ 借しむ君かな 仮の宿を 惜しむ君かな (この世から離れて出家するのは難しいでしょうが、旅人に宿を貸すくらいのこと、あなたは惜しむのですね) すると妙は、西行を呼び戻して歌を返しました。世を厭ふ 人とし聞けば 仮の宿に 心とむなと 思ふばかりぞ (出家された方と伺ったので、この仮の宿に執着してはいけないと思っただけなのです) (西行物語など) この話の中で注目されるのは、二人の歌に詠み込まれている「仮の宿」という言葉でしょう。旅先で一晩の雨宿りを「仮の宿」と歌った西行に対して、この家だけではなく、今生きている現世(俗世)もまた所詮は「仮の宿」のようなものと切り返しています。仏教の教えをもとにして穏やかにたしなめた遊女妙に、出家者西行は一本取られてしまったようです。此の世は仮の宿なり (『平家物語』「祇王」) (この世は儚い、かりそめの住まいのようなもの) 人生の旅路も、仮の宿りに過ぎないのでしょいか。死出の田長(あの世から来て鳴く鳥)とも呼ばれるホトトギスがいつの日か山へと帰っていくように、私たちにもしっかりと立ちの日は必ずやってきます。それまでに少しでも果報を積みたいたいです。(栃木北部教区普濟寺)

法の水茎

大正大学講師 高橋秀城

(121)

今年(今年)は全国的に雨の季節が短かったようです。「梅雨寒」という言葉もどこへやら……関東甲信地方でも、観測史上最も早い梅雨明け宣言となりました。「空梅雨、土用蒸し」とも言われるように、この夏は、このまま蒸し暑い天候が続いていくのでしょうか。農作物や日常生活に影響が出ないことを祈ります。

今さらに

山へ帰るな

郭公

声の限りは 我が宿に鳴け

(『古今集』よみ人しらす) (今になって山へ帰るなホトトギスよ。声の続く限りは、我が家の庭先で鳴いてほしいよ)

ホトトギスは、梅雨が明けて気温が高くなると鳴き止んでしまうそうで

す。「不如帰」(帰らぬ)という異名もあるホトトギスですが、もう少しの間、透き通る美声を近くで披露してくれたらとも思います。七月に入れば、新暦の七夕が巡ってきます。例年は梅雨の最中に当たりますが、今年(今年)は晴れた夜空で無事に巡り逢えるかもしれません。

平安初期の歌人、在原業平(八二五〜八八〇)

は、狩りに出かけて天の川という所に辿り着き、そこで酒宴を催したついでに歌を詠みました。

狩り暮し

たなばたつめに 宿からむ 天の河原に 我は来にけり

(狩りをして日が暮れたので、今宵は織女に宿を借りよう。私たちは天の

河原という場所に来てしまったのだから) 業平は、地名の「天野川」(現在の大阪府枚方市を流れる川)から、夜空に輝く「天の川銀河」を連想し、その川岸に住むという織姫(織女)に一夜の宿を求めました。この歌に対して、側に控えていた紀有常(八一五〜八七七)も一首詠じました。

ひととせに

ひとたび来ます 君待てば 宿かす人も

あらじと思ふ

(以上二首『古今集』)

『伊勢物語』にもあり

二年に一度だけやってくる人を待っているのだから、宿を貸してもらえ男などいらないと思うよ

梅雨明けが早まった今年、織姫と彦星(牽牛)は期待に胸をときめかせているかもしれません。たとえ七日以外が晴れ渡っていたとしても、彦星の他には誰一人として泊まることは許されないので



高尾山でも早い梅雨明けとなりました

さて今回は、こうした来訪者を「温かくもてなす心」について書いてみます。これまで、お金や品物を使わなくても「大果報」(大いなる幸せ)が得

られるという「無財の七施」について見てきました。その最後の七つ目に挙げられているのは「房舎施」と呼ばれる教えです。「房舎施」については、『雑宝藏経』には「前の父母・師長・沙門・婆羅門に、屋舎の中、行来坐臥を得さしむ」と説かれています。

神変祭 厳修

六月七日(火)



神変様の御遺徳を偲び法要を執り行う

六月七日、神変堂において、神変祭が行われました。お祀りされている神変大菩薩は修験道の開祖であり、役行者の名前でも知られております。

神変様の御命日と伝わるこの日、神変様の教えである、庶民の救いとなる、「生活の中の仏教」の実現を願って、厳粛に法要が行われました。

現在では健脚や腰痛平癒の御利益を求め、御参詣や登山の皆様が熱心にお祈りされております。

成田山勸学院生来山

六月十三日、真言宗智山派・大本山成田山にある、僧侶の修行教育を目的とした勸学院の修行僧二名と引率の二名が、深緑の高尾山に來山されました。

一行は特別大護摩供修行にて、修行の無魔成満を祈念されました。成田山勸学院は、総本山智積院にある、智山専修学院と同様に、大勢の優秀な僧侶を輩出しております。



宿坊前にて佐藤貫首と勸学院の皆様



牧山館長ご夫妻と佐藤貫首

六月二十五日、町田市より武相荘高尾山遠足の御一行が梅雨の晴れ間となった高尾山を訪れました。

武相荘とは、実業家であり、吉田茂首相の側近としても知られる白洲次郎氏の邸宅であり、現在は「旧白洲邸・武相荘」として、記念館・資料館となり、一般公開されております。武相荘の館長は白洲次郎氏の長女・牧山桂子さんが務められております。名前の由来は武相荘の位置する場所が武蔵国（現在の東京都・埼玉県）と相模国（現在の神奈川県）の境に位置していることと、不愛想が掛けられているからです。

御一行は僧侶による境内案内、佐藤貫首の法話を聴講し、お護摩修行への参列や書院案内を受けて、高尾山を満喫されました。

武相荘高尾山遠足御一行來山

六月二十五日(土)

深夜の高尾山中を行く

第百十九回 信徒峰中修行会

六月四日(土)



有喜閣にて佐藤貫首と記念撮影をする修行会参加の皆様

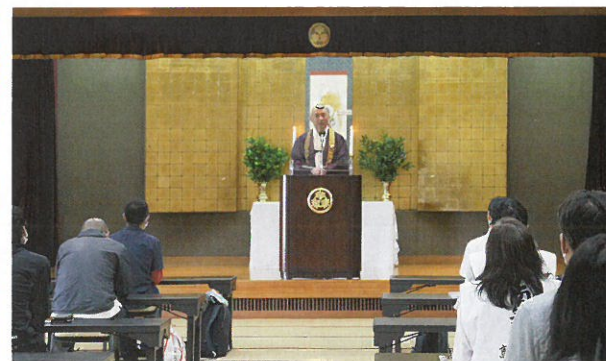
去る六月四日、「第百十九回 高尾山信徒峰中修行会」が行われました。本年は新型コロナウイルス感染症の影響を鑑み、宿泊を伴わず、午前二時から夕方までの日帰り行程となりました。

深夜に山麓の不動院を出立した先達と修行者の約三十名の一行は、暗闇の登山道を高尾山頂まで練行してご来光を拝し、早朝の御護摩修行に参列されました。

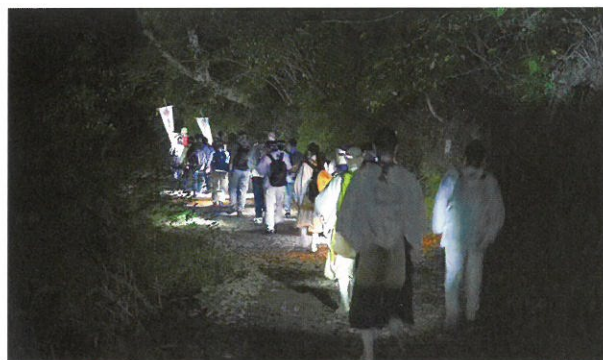
朝食の後、佐藤貫首による修験道について法話を聴講し、心静かに般若心経を写経致しました。その後有喜苑において、佐藤貫首御導師のもと柴燈大護摩供が厳修され、修行者の皆様も共に祈りを捧げられました。



有喜苑にて行われた柴燈大護摩供



修験道について法話する貫首



深夜の高尾山中を練行する



一文字一文字丁寧に写経を行う

観音菩薩の宗教

55

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

観音菩薩の転生者としての聖徳太子と空海

太子と空海 (その18)

『日本書紀』などに記された聖徳太子は、平安期の『聖徳太子伝暦』により観音菩薩の生まれ変わりとする信仰が広まるとともに、太子本人が前世を語ったり平安遷都を予言するなど、過現末の三世を自在に語る異能を示すようになった。ことに中世には予言者たる太子像が増幅し、『未来記』の著者として語られた。三世に互る太子の永続性は、ブツダの法身にも通底する思想と見ることができよう。この思想に観音菩薩の「アヴァターラ」(権化・化身)の思想が加わり、太子は後の世までも聖武天皇などの仏教に傑出した人物に生まれ変わったとされ(金岡秀郎

「観音菩薩の宗教」⑤⑥参照)、日本仏教の中心を歩み続けていった。ことに太子は後世の高僧たちに転生・垂迹することにより、不滅の本地となつたといえる。

そのひとりが真言宗の開祖の弘法大師空海である。鎌倉初期、十二世紀の成立とされる歴史物語の『水鏡』は、弘法大師の本地を遠くは大日如来、近くは六臂の如意輪観音菩薩とし、さらには聖徳太子の再誕であると述べている。『水鏡』には複数の流布本があるが、太子と弘法大師の関係を記しているのは前田侯爵家所蔵本である。以下は、弘法大師の書が優れ、「五筆和尚」と号されたことなど

を述べた後の一節である。ここでは原文にはないルビを旧仮名式で施した。原文に続いて筆者による現代語訳と解説を示す。

「大方此大師ト申ハ、昔ノ聖徳太子御再誕ニテ御座バ。遠キ御本地ハ兩界不二ノ大日如来。近ハ六臂ノ如意輪救世観音ノ垂迹ニテ御座レバ。御振舞ノ不思議ハ、驚ニ及ザル事ナレ共。凡夫ノ御姿ノ當体ニヨリテ見奉ニハ。不思議タ々々ノ御事共也」

『水鏡・大鏡』新訂増補 国史体系、第二十一巻上。吉川弘文館。一九三九年。九五頁

「だいたい、この(弘法)大師と申し上げるのは、昔の聖徳太子が再びお生まれになったのであるの、遠いご本地は兩界(にいらっしやる)分けることのできない大日如来で、近くは六臂の如意輪救世観音がこの世に現れられたのでございます。ですから(弘法大師の)お振舞いが不思議であるのは驚くに値しないことですが、わ

れわれと同じようなお姿のお身体を拝見すると、不思議なことばかりでございます」

ここでいくつか解説を加えよう。「兩界不二」とは、密教の重要思想で「金胎」すなわち金剛界と胎藏界が二つであつて二つでないことを意味する。金剛界は唯識の流れを汲み、実践を旨とする大日如来の「理」をあらわす。一方、胎藏界は空觀の系統で、慈悲に基づく大日如来の「智」をしめす。長いあいだ大乘仏教は兩派の分離に苦悶してきたが、密教はこれを不二として合一した。教えとしては二流であるが、両者は一体となつてこそ意味がある。これを金胎不二ともいう。

あえて西欧の哲学の術語を用いれば、二元論(dualism)ないし二項対立(dichotomy)の否定、もしくは止揚といえる。西欧の哲学、ことにキリスト教などでは、神と悪、魔、肉体と精神、善と悪、

男と女のごとく二元的に捉える傾向がある。キリスト教の裏返しであるマルクス主義における労働者と資本家も二元論的思想である。仏教では両極端の二項対立を嫌い、ブツダ以来、中道(Madhyama-pratipad)を最善としてきた。不二もまたその文脈に位置づけられる。

インドでは二つの概念がありながら、それを合わせて一つとなることをドウヴァイタ・アドヴァイタイタ(dvaita-advaita)といい、漢訳して「二而不二」という。ドウヴァイタは英語の two やドイツ語の Zwei と同根の語で、「ふたつであること」を意味し、アドヴァイタはその否定「二つでないこと」である。二而不二は、「二にして二ならず」と読む。兩界不二とは、いくら智慧があつても実践を伴わなければ意味がない、または智慧の裏付けのない実践は不適格ということである。智慧はまた慈悲



弘法大師空海御影 高尾山薬王院蔵

に置き換えることができず。空海がもたらした金剛界曼荼羅は金剛界大日如来の理を描き、胎藏曼荼羅は胎藏界大日如来の智を图示する。兩者を不二としたのが空海の教で、上記の文は空海の遠き祖先、本地を「金胎不二」の大日如来としたものである。大日如来はそれぞれの曼荼羅において別名で描かれるが、その本体は一尊すなわち不二である。上記の文は、不二の大日如来を空海の本地とする。それはまた

空海は思想と肉身が異なることにも通ずる。続いて『水鏡』は、空海の近き本地を如意輪救世観音とする。如意輪観音菩薩はすでに奈良時代にはその名前が知られ、如意輪陀羅尼も唱えられた(井上一稔『如意輪観音像・馬頭観音像』日本の美術5、一九九二年、二六―二八頁)。弘く信仰され造像が盛んになったのは、平安時代の醍醐寺を中心とする空海の弟子たちによつてである(清水紀枝『院政期真言密教をめぐ

る如意輪観音の造像と信仰』早稲田大学博士論文)。鎌倉時代には上記『水鏡』に見られるように、弘法大師は聖徳太子の再誕とされ、その結果、弘法大師と如意輪観音が結びつけられることになった。ここに見る如意輪救世観音は経典に見られぬ尊名であるが、救世の語が入ることによつて聖徳太子との深い関係を示している。聖徳太子が如意輪救世観音の垂迹とすれば、その再誕とされる弘法大師もまた如意輪観音の化

身ということになる。密教では元来、空海のもとから胎藏曼荼羅の蓮華部院において観音菩薩が重視された。蓮華部院は観自在院とも呼ばれ、観音菩薩の慈悲を示す。空海の思想から見ても、空海の本地を観音菩薩に遡及することに思想的齟齬はない。

飛鳥時代に活躍した聖徳太子は、平安時代ごろより観音菩薩の生まれ変わりと信ぜられ、薨去後も転生し日本仏教を支え続けた。鎌倉時代の『水鏡』は、さらに太子が弘法大師に転生したと述べている。そこには観音菩薩(如意輪観音)から聖徳太子、弘法大師と続く連綿たる「不可思議」の精神の系譜を見ることができ。次号では真言宗系の文献から、さらにその系譜をたどってみたい。

次に『水鏡』は、弘法大師が凡夫と同じ肉体、生身を持ちながら、その行いが不思議であるのは弘法大師が如意輪観音、さらには聖徳太子の垂迹であるからとする。「不可思議」は「不可思議」ともいわれ、ともに仏教語である。訓読みすれば「思議せず」「思議すべからず」と読み、いくら考えても理由のわからぬことを意味する。ことに仏の智慧や功徳のありがたさを指す。私事になるが、筆者は国際教養大学で内外の学生たちに英語で東洋史や仏教の哲学などを講じている。そのさい、仏教語をいかに英語に置き換

平成十七年二月三日、節分会の豆まき式に参加したことが、私の高尾山登山の第一回目です。近年では、令和元年六月二十七日に五千回登山を達成し、このたび約三年を掛け、令和四年四月二十七日にめでたく六千回登山を達成することができました。

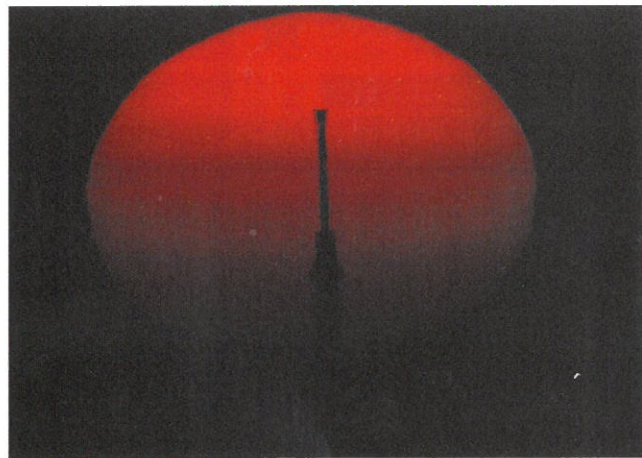
思い起こすところ、この三年間はダイヤモンドプリンセス号にての新型コロナウイルス感染症の発生により、全国的に感染が増え、緊急事態宣言やまん延防止法の発令により、不要不急の外出自粛の事態になりましたね。そのコロナ禍で東京オリンピックが開催され、大成功を収めたことは記憶に新しいですね。私は三密を避ける為に、



八王子市 弓立昭彦

夜中に高尾山を登ることを決めて、午前三時前から毎日一号路を登って薬王院でお参りし、山頂で引き返して下山してあります。

月に一、二回ほどでしようか、夜中の高尾山を初めて登る方に遭遇した時は、ナイトガイドをしたことがあります。高尾山名所案内、または薬王院の歴史等説明しながら山頂までガイドしております。特に夜景と日の出に、皆さん感動され



スカイツリーの向こう側から昇る日の出(撮影・弓立昭彦氏)

私の最近の登山での思い出は、四月に二回目となるスカイツリーの向こう側から昇る日の出を写真に収めることができました。

これからもコロナが続くと思います。高尾山には季節ごとに咲く山野草や魅力的な風景が沢山あります。皆様健康に留意して、無理をせず高尾山の春夏秋冬を満喫して下さい。

第四十七回 高尾山慶賛会 通常総会開催

去る六月二十日、第四十七回高尾山慶賛会通常総会が八王子エルシイにて開催され、約九十名の方々に御参加頂きました。

総会は慶賛会々々長である、大野彰氏の挨拶により開会し、議長の選出、令和三年度の事業報告及び会計報告、監査報告、令和四年度の事業計画案及び予算案の順で議事が進められました。

続いて高尾山協賛各団体に、高尾山及び高尾山慶賛会より賛助金が贈呈されました。また、慶賛会より佐藤貫首が本年四月に晋山されたことを記念して晋山記念寄進を頂きました。その後貫首より謝辞が述べられ、無事に閉会となりました。

総会後には貫首の晋山を記念し、「靈氣満山 高尾山」の縁起や修験道についてご法話を頂き、高尾山と益々の御縁を深められました。



佐藤貫首による記念法話「靈氣満山 高尾山」



挨拶する大野彰慶賛会々長

慶賛会 入会のすすめ

もともと仏教語で「慶賛」とは、仏教寺院、堂塔などの新築、修繕を祝賀する意味であります。高尾山慶賛会は、高尾山古来から伝承された年中行事を賛助し、御本尊・飯縄大権現様を尊信し、地域社会の親睦を図ることを目的としております。

近年では高尾山は「靈氣満山 高尾山」人々の祈りが紡ぐ桑都物語」というテーマで日本遺産に選ばれており、多くの参拝者が来られています。

ぜひとも茲に広く高尾山慶賛会員を募り、ご加入ご協賛を頂き、ご本尊様の威神力に浴されますよう祈念するものであります。

年会費 一口五千元

詳細は高尾山慶賛会事務局にご連絡下さい。
〇四二一六六一一二五



侍装束を着た慶賛会の皆様



参籠所である宿坊の大玄関にて

智山専修学院生 来山される

六月二日、真言宗智山派の僧侶育成機関である、智山専修学院より、十六名の修行僧と引率の本山僧侶二名の総勢十八名が高尾山に訪れました。

一行は関東三大本山巡りの一環として、成田山新勝寺・川崎大師平間寺を参拝の後、高尾山の宿坊に参籠翌朝の大護摩供修行に参列して、修行満足と学業成就を御祈念され、朝食の後、無事下山されました。

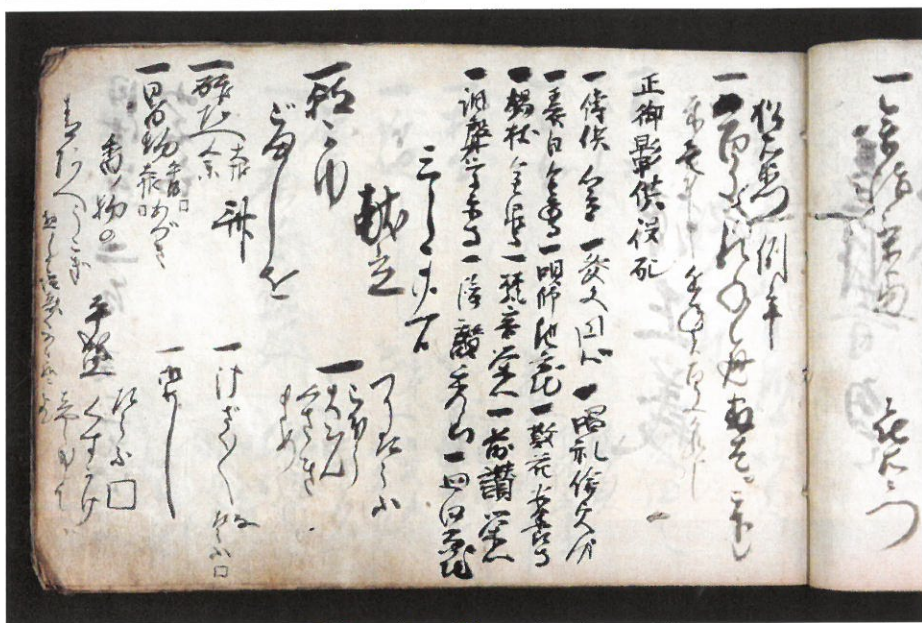
高尾山年代記

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館 外山 徹

31

十四世秀永8 高尾山の台所



享保4年(1719)御影供の献立(法政大学多摩図書館寄託)

享保元年(一七二六)からしばらくの間書き継がれた「年々諸用記」という帳面からは、当時の高尾山信仰の様相とともに、山内における日々の用務の様子を垣間見ることができている。

山内で供せられた食事

前回、参籠者の一汁一菜による食事の様子を見たが、帳面には享保四年の弘法大師御影供の際に提供された料理に関する記事もある。当時、山内でのような食生活があったのか、その様子を再現してみたい。帳面には「三月廿一日献立」として以下の記事がある。

一朝かゆ

ごましを

「朝粥」とは文字通り、朝食に供せられたものと推測されるが、毎朝の食事であればここに特記することもないだろう。御影供の執行には相模北部(神奈川県相模原市)の金泉寺が参列したり、近隣の素封家の子弟が手伝

いに来ているので、その賄いかもしれない。

いりたうふ

こほう(ごぼう)

一大こん

くさき

まめ

そして、「炒豆腐」の続きに食材が列記されているが、調理法が示されていないので、具材なのだろうか。「くさき(臭木)」はシソ科の山菜と推測される。

一酢あへ

大根 齋

一汁ざくく

な たうふ

一煮物

牛房 あづき 大根

一御めし

香ノ物の

青あへ うこぎ

平盛

くすかけ

しやうゆにて

と記される(原表記の通り)。「齋」という文字は「酢あへ」の一つ書きの下部になってしまっているが、文字の大きさから見出し

として記されたと言えるだろう。つまり、「お齋」とは法会の際に提供される食事の意味で、以下が参列者らに振舞われた坊入りのメニューということなのだろう。

「酢和え」は今日でも正月料理にポピュラーな紅白膾である。「豆腐と菜つ葉の「汁ざくく」とは、具材の切り方を表したものの。豆腐の下の□印は賽の目切りを示したものの、賽の目にした野菜を具材とした「ざくざく」という汁が福島県の郷土料理にある。「煮物」は牛蒡・小豆・大根の組み合わせ。「御飯」は主食で、祭事の食事と考えると白米のみであったかもしれない。「香の物」は漬物のことだが、「うこぎ」は山菜の一種で山形県の名産として知られる。「平盛」は平椀に盛られた意味で、豆腐の葛かけは醤油で味をつけるとある。

これらの食材の一部は常時備蓄されていたこと

が、享保四年五月晦日改とする「俵物覚」という記事に見える。玄米、大豆、粟、大麦、小麦、付麦、そば、粉、小麦糀といった品目があり、西極大上、西一番、戊一番、戊二番、味噌本糀、上味噌、中味噌といった記載もある。干支の記されたものが醤油であることは他の記事から判明し、それは購入時期のことではなく、山内で自製された時期であることもわかる。大麦・小麦、小麦糀は、醤油や味噌の材料ということになる。

醤油の仕込み

戊(享保三)九月二六日に「醤油糀仕入(込)ねかし」という記事がある。その後、「二番醤油 戌十月十四日仕込」とあるので九月の分がその年の一番となる。三番は「戌の越年」として翌亥年四月九日に仕込んである。先の「俵物覚」に戌三番の記載がないのは仕込んで間がなく蔵に納められていなかったのだろう。

「越年」という表現から、定例的に年三回醸造していたことがわかる。

記事の中には断片的ながら醤油の製法についての文言がある。「小麦一升ずいぶんよくつき、三度四度程」「大豆三合よく蒸し、右日に干し水ひたひたに入れ、塩三合入れる」、別の記事では小麦は「煎り」という具合である。蒸した大豆と砕いて煎った小麦に種麴を加えるという、現在の製法と基本的に同じ方法が採られていたようだ。「米でかゆ六升入り 糀五合塩」というのは、米を材料に麴菌を培養して種麴とする工程だろう。亥六月の仕込みでは、二四日に小麦を煎り、翌二五日に大豆と大麦の「洗い仕込み」、二六日に「蒸かし寝かし」と、三日間にわたる作業の様子が記されている。

四斗四升の出来が見込まれている。これは一升瓶にして二四本分である。亥六月の大豆は六斗、寅六月にも七斗が仕込まれているので、戌一番だけのことさら多いわけではないようだ。先の「俵物覚」には醤油二五樽が記されており、サイズは不詳ながらかなりの備蓄であり、自家用はもちろん参籠者に供するにも余りあるように思われる。

その消費量を蔵改めの記事から検証してみよう。「俵物覚」と同じ年九月二二日の改めを較べると、西一番と「大極上」の一樽はそのまま、戌一番四樽で一樽減、二番八樽は「今日より口明け」とあるので五月からそのままだったようだ。この「口明け」を使用開始時期とする仕込みから九ヶ月後ということになる。五月からの四カ月弱で一樽の消費というところ。ところが、さらに四カ月と少し後の子二月一日の改めでは戌一番は二樽、二番が

五樽、三番が六樽から三樽と、合わせて八樽もの減り具合からすると、山外へ持ち出されたことも考慮せざるを得ない。

調味料の自製

蔵には味噌の桶もあつたが、味噌の醸造に関する記事もある。「中」「上」「極上」という等級の別があり、「この塩加減にては甘く有るべくござせうろう間、(塩を)重ねて入れしかるべく」というような記述もあり、味わいにもこだわりがあったようだ。等級の違いは糀(麴)の別のように、中味噌は「ふすま糀」、上味噌は「麦糀」、極上には「米糀」を使用する記載がある。戌一〇月八日には上味噌二石仕込み、亥一〇月二五日極上本糀味噌は大斗八斗本糀六斗五升といった具合に、年に数度、自家用にはかなり多い量が仕込まれている。

蔵改めに記載はないが、胡麻油についても「ごま壹升に油三合五勺出」と

というように、自製していたことこのわかる記事がある。亥九月二二日付では「油樽四五升」とあり、醤油や味噌と同様に備蓄されていたようだ。冒頭に紹介した料理は、周辺で採取された穀類・野菜・山菜類を、汁は味噌、煮物は醤油、煎り豆腐のようなものは胡麻油というように、自製の調味料で調理していたようだ。

それから去ること二二〇余年の後、幕末の弘化二年(一八四五)の会計簿には、醤油と胡麻油を購入した記録が出て来る。味噌は赤味噌が一回出てくるだけなので未だ自製の可能性はあるが、その間、一八世紀の半ばには商品経済の発達があり、消費行動のあり方も大きく変わった。

おことわり

本連載では史料の引用について、適宜読みやすく原文に手を加えています。

高尾山小物器 51

宿坊



絵・橋本豊治

高尾山の井戸

高尾山上には、およそ五十四メートルの深さから地下水をくみ上げる井戸があったと伝えられております。参詣者にとっては珍しいものであったようで、井戸を見物したという記録が残っております。

各地の霊山・霊場では、参詣者のために宿坊が併設されたり、社寺周辺に多くの宿泊施設が林立する、登拝集落が発達する事例がありました。

高尾山では近隣に甲州街道随一の宿場町、八王子宿が存在したためか、参詣者数こそ多かったものの、登拝集落は形成されませんでした。

江戸時代初期の千六百年代には宿泊客がいた可能性が指摘され、千七百年代には宿坊の有無は判明しておりませんが、富士山への参詣者が参籠した記録が残っております。江戸時代後期の千八百年代には、相当数が宿坊に参籠し、水が不足しがちな山中でありながら井戸の地下水を用いて宿泊者のために風呂を焚き、食事を提供していたことが記されております。

現代の高尾山でも、講中や修行の方々が宿坊に参籠され、早朝の御護摩修行に参列する姿は変わらずに続いております。

いけばなの心 29

華道教授 佐藤 宗明

今回の作品は河骨という草木を使った、生花正風体です。

河骨は池や沼地に生息するものなので、普通の庭などではあまり見られませんが、昔は田んぼや川の脇などでよく見かけたのですが、最近では植物園や整備された池や川などで見かける事の方が多いと思います。水物の花材は他にかきつばたやふと、蒲などがあります。どの花材も情景を想像すると涼し気な水辺が思い起こされると思います。生ける時もその風情を大切にしていくな必要があります。

暑くなってきましたので、この作品は水を多く見せる砂鉢を花器に使用し、『魚道生』の花形で作品を整えました。また意図的に挿口を全体的

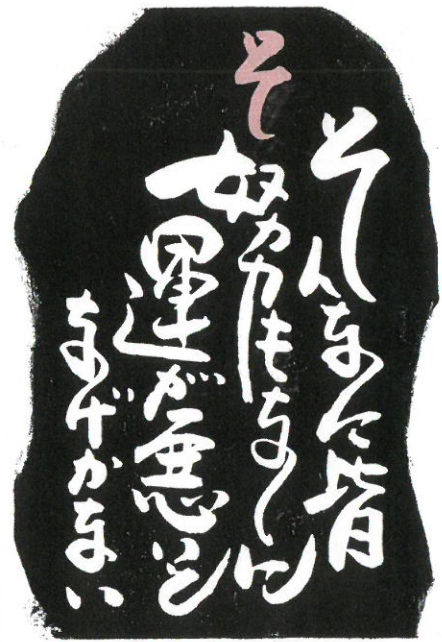
に左側にずらしてあります。これにより右側に空間が大きく広がり、水面がより大きく見えます。そして、その上に伸びる河骨の葉が軽やかに見えるように構成しました。

河骨は徐々に自生地域が減少しており、一部地域では絶滅危惧種に指定されています。今回の花材はもちろん生産者の方に育てて頂いているものです。それでもあまり見かける花材ではありません。皆様に河骨の魅力をお伝えできれば幸いです。



花材…河骨

いろは 天狗の落し文 18



そ

そんなに皆努力もなしに 運が悪いと嘆かない

物事がうまく運ばない時には、「ツキが無かつた」などと、不運と感じてしまう人が多いことでしょう。確かに運不運は大事な要素ですが、運を引き寄せるための努力を忘れてはいけません。人事を尽くして天命を待つという言葉にもありますように、最初から運頼み、神頼みとせず、まずは最善の努力をしてみましよう。

江戸消防記念会 第十区高尾山高聲會 木遣塚祭

六月二十日 於・飯縄権現堂下踊場



夏遊妙法院門跡

京阪婦女再山登

身體健全臉色勝

立即痊癒白血病

敬虔信徒一加増

上洛雜感(2)

同じ空の

下にある人類は

同じ賜物と朗らかに受けよ

夏、妙法院門跡に遊ぶ

参籠せし智積院様より妙法院様へ向かふと、京阪電鉄でお会いした例のご婦人が顔色も頗る良く

お普賢会に参列...

『戴いた果物を有難く食べましたら長年の持病の白血病が即座に癒え、お蔭様で元気に成る事が出来ました』とのこと... 此れは、私を媒介として智積院様・妙法院様の神仏が彼女の病を癒した事と確信する...

厚木市 荒井 一雄

恩師・菊地正先生に学ぶ③
創作書おろし

にっこり地蔵と目星婆さん

とんとん健康散歩の会
石井忠明

とんとん昔、八王子が横山と呼ばれていた頃、あるところに腹黒い庄屋夫婦が住んでいた。庄屋はケチの塊のような人で、農家からコメや油を二束三文で買い叩き、商人などに法外な値段で売って、暴利を貪っていた。近所の人達は庄屋をケチ大尽と噂していた。

その庄屋夫婦には、似ても似つかぬ気立ての優しい娘がおつてな、その娘が年頃になると、どういふ訳か急に眼が痛くなつて、だんだん見えなくなりました。目脂で目が開けられなくなつたんじゃないかと。娘さんは仕方なく、近くのお地蔵さんへ目が治りますようにと、毎日願掛けに通つた。

今日も朝早くお地蔵さんにお米をお供えし、目が早く治りますようにと拜んでいると、お地蔵さんはニツコリと目を開き、「娘さん、小門に住む目星を治すハル婆さんの所へ行きなさい」と言われた。娘さんは両親に手を支えてもらいながら、婆さんの家を訪ねることにした。

ハル婆さんの家をやつと捜し当てると、「そろそろ来る頃と思つちよつた。早う上がつて目を見せろ」。ハル婆さんは真水で手をよく洗い、娘の両眼をひっくり返すように診た。そう。娘さんは「ハハー、目星じゃのう。それにしてもかなり酷い。あ、どれ背中を見せろ、男しは隣の部屋な」

娘の居る部屋は障子で仕切られ、ハル婆さんと娘の二人きりになった。娘は恥じらいながら上半身裸になり、ハル婆さんに背中を診てもらつた。汗疹に似たような吹き出物がある。するとハル婆さんは「もういいよ」と言つて、何もしないで「明日の四つ(午前十時頃)を過ぎてからきなせいよ」と言つて娘さんと両親を帰させた。朝、娘さんは杖を頼りにハル婆さんを訪ねると、昨日と同じように障子で仕切られた部屋に通され、早速娘さんの背中を診ると、「できとるできとる、昨日より沢山あるの、それじゃあそろそろ焼くべいかあ」と言つてな、古びた箱の中から真ん中が四角い『寛永通宝』の銭と、山吹

の芯を干した細長い灯心、それに灯明(神仏に供える小さな蠟燭)を取り出してな、小さな皿にごま油を垂らし、火が付いている蠟燭から灯心の先に火を着け、吹き出物ができている背中に、銭を押し付け、一つ一つ焼いていった。

その焼いている時に出る音が、パチーンと障子の外まで聞こえたと。ハル婆さんは、「熱かったら熱いといひなせいよ」。娘さんは眼が良くなればこの位なんでもないと思ひ、一生懸命我慢していた。もう大分焼いたかのお、今日はこん位にすべえ」と言ひながら柔らかな和紙で焼いた背中をポンポン優しく叩き、着物を着させてくれた。

娘さんはハル婆さんに聞いた。どうして目を治すのにハル婆さんは、それを焼くのかえ。それはお、お前さんの月が明けてすつかり眼が良くなった娘さんは、両親と一緒にハル婆さんの家にお礼にいつたそう。そんな、両親も悪どい商いをやめ、貧しい人達には米や油をただで振る舞つたと言ふことじゃ。ハル婆さんは八王子空襲で焼け野原になつても、バラック小屋で「目星」という病を治しつづけたということじゃ。



寛永通宝の古銭

高尾山環境保全基金協力会総会

五月三十日(月)

五月三十日、ライオンズクラブの有志の方々と構成された高尾山環境保全基金協力会(石井征二会長)の皆様が御来山し、客殿大広間において定例総会を開催されました。

環境保全基金協力は、高尾山がミシランガイドブックに自然豊かな山と評価されて三ツ星に選ばれたことを契機に、後世までこの自然を残していきたいとの思いから平成二十一年に結成され、記念碑を建立しました。

その後はごみの持ち帰り運動を伝える看板や、登山者のための休憩用のベンチの奉納、増加するトイレ需要を満たすためのトイレトパー補充などに、ご協力頂いております。協力会の皆様は、登山道を歩いて登りながら以前に設置した休憩用イスや、看板を視察されました。

総会には約四十名が出席して事業報告と事業計画を討論。今後の活動に向かつてさらなる飛躍と充実をはかろうと活発に意見交換されておりました。



宿坊前にて記念撮影する高尾山環境保全基金協力会の皆様



にっこり笑ったお地蔵様

のことじゃつた。何時ものように娘さんはハル婆さんに背中を見せると、「おお吹き出物が出なくなつた。もう大丈夫、来なくてもよい、よおがんぼつたのお、但し暫くして地蔵様へお礼に行つとくんじゃぞ」。娘さんはハル婆さんに、長い間の治療代を思い切つて聞いてみたんだと、そしたらなあ、「銭などいらぬわ、人助けになればそれで良い。ただ米が少々欲しいのお」

月が明けてすつかり眼が良くなった娘さんは、両親と一緒にハル婆さんの家にお礼にいつたそう。そんな、両親も悪どい商いをやめ、貧しい人達には米や油をただで振る舞つたと言ふことじゃ。ハル婆さんは八王子空襲で焼け野原になつても、バラック小屋で「目星」という病を治しつづけたということじゃ。

高尾山 季節散歩

暦の言葉 「七十二候」
土潤溽暑

「つちうるおうてむしあつし」
七月二十八日〜八月一日頃

「溽暑」とは、蒸し暑いということ、地面から立ち上る湿気が陽炎となるほど熱気があります。人間には暑さが耐え難くなってきましたが、朝顔やヒマワリなどの夏の植物が、元気に咲き始める頃となります。

今月の風物詩

麦茶

麦茶は焙煎した大麦の種を、お湯で煮出して煎じたり、水で浸出して作った飲みものです。カフェインが含まれていないため、利尿作用がなく、夏場の水分補給として冷やして飲むことが多いでしょう。

一步一步煩惱滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

六段 負けたことから得る学びがある

人は勝った時よりも、負けた時の方が真剣に反省して失敗の原因を探り戒めとします。それは、負けは恥と考へ、二度と同じことを繰り返したくないからでしょう。そのため恥を恥と思わないと負け癖がついてしまうことには、注意しましょう。

『高尾山健康登山の証』のお勧め

年間約二百八十万人の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、今では約五万人の方々が会員となられております。期限はございませんので、御自分のペースでお楽しみ下さい。また、一冊に付き二十一回スタンプを押すページがあり、終了したことを満行と言います。満行されますとお祝い膳として精進料理の御接待や、健康登山者限定の記念品などと交換もできます。



おはなし散歩道 月に誓って

八王子市 池田美絵

「康介、いつになったらできるんだよ！ 本番まであと何日だと思っただよ！ もう吹かなくていいよー」。

とうとう裕也の堪忍袋の緒が切れた。

裕也たちは、九月に開かれるコンテストに金管五重奏での出場が決まっていた。今は中学最後の夏休み。三年間の集大成としてこの大会にかけていた。

金管五重奏は、二本のトランペット、ホルン、トロンボーン、チューバで奏でる。裕也はトランペットの担当だった。この曲はソロの場面が多くあり、譜面を見た時から意気が上がっていた。もちろん、トロンボーンを担当する康介にも印象的なフレーズが与えられている。しかし、何度合

わせても彼のところで流れが止まってしまっ

そんなことから裕也の怒りが爆発したのだ。結局、険悪な空気のまま練習が終わり、康介は小さな声で「ごめん」と言い残して部屋を出ていった。

裕也は康介の様子が気にはなつたが、「あいつがみんなの足を引っ張っている。おれは間違ったことは言っていない」と腹立ちまぎれに自分に言い聞かせた。

家に帰ると母親はおらず、祖母が出迎えてくれた。

「ゆうちゃん、お帰りなさい。ママは仕事で遅くなるそうだから、今日はおばあちゃんのカレー。早く着替えていらっしやい」

裕也はぶつきらぼうに

返事をする、部屋着に着替えて食卓についた。

「ゆうちゃんは趣味があつて、いいね」

祖母がおもむろに尋ねた。

「音楽のこと？」

「そうよ。高尚な趣味じゃない？」

「音楽を趣味だなんて思ったことはないよ。そんな生易しいものじゃないんだ」

裕也はさし迫ったコンテストのことを考え、重たい気持ちになった。

おなかがいっぱいになり、自室に戻った裕也はフーツとため息をついた。今日はテレビを見る気も起きない。

窓を開けると夏の夜空にまるい大きな月が浮かんでいた。でも今日の月はなんだかかび割れて見える。裕也が怒鳴ったときの康介の悲しそうな顔と重なるようだった。そしてまた、裕也の心もキリキリと痛んだ。

「よい演奏をしたい気持ちにはみんな同じ。ひとつ

健康登山者投稿作品

季節の絵手紙

八王子市 栃谷 玲子

「ゆったりなぼる」



「いきいきと」



カラスウリ

の目標に向かって努力しているのに、なんて言い方をしてしまったんだ」。

月明かりが照らす静かな夜だった。裕也は長い時間、夜空を見上げていた。

「ほんとうならあの時、すぐに言えればよかった

けれど」

その言葉に行きつくと、裕也のなかに温かいものが広がった。

「明日、真っ先に謝ろう。康介は許してくれるかな。ごめんね」。

(挿し絵・小出 茂)





■ 八月行事日程

一日～七日

聖天秘供(聖天堂)

八日、二十日

弁天様御縁日

八日

仏舍利詣り(仏舍利塔)

九日

御詠歌勉強会

二十七日

月例写経会

二十八日

奥之院開扉供養

(十時奥之院)

高尾山とんとんむかし

「語り部の会」

(十二時半山麓不動院)

二十一日

飯縄様御縁日

神徳報謝百味飲食供

(九時大本堂)

☆ 神徳報謝百味飲食供

高尾山御本尊飯縄大権現様の日々の御加護に感謝し、沢山の御供物を捧げて御本尊様威光倍増の為、御供養申し上げる法要です。

皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は大本堂までお申し出下さい。尚、法要終了後に百味のお札を授与致します。
毎月二十一日午前九時勤修御志納金 一口三千円以上

毎日の
お護摩奉修時間

(4月15日～10月31日まで)

午前5時30分
// 9時30分
// 11時00分

午後0時30分
// 2時00分
// 3時30分

ご講中・団体等御相談下さい。

高尾山の昆虫

ハグロトンボ

153

水生植物が茂る緩やかな川面を四枚の翅を小刻みに羽ばたかせて、ひらひらと繊細に飛ぶトンボ、それがハグロトンボ(羽黒蜻蛉)です。



トンボとしては大型で体はイトトンボのように細長く、その名のとおり黒い翅を持ちます。オスの胴体は金属光沢がある美しい金緑色を帯び、メスはやや地味な黒色で喪服のような雰囲気を感じます。

この夏に現われる黒いトンボを縁起が悪いと捉えることもあるようですが、神様トンボ、極楽トンボとの言い伝えもあるようで神聖な生き物とされることも少なくありません。

私はこのハグロトンボを初めて見た時は、その怪しいまでの神秘的な佇まいと幻想的な動きにすっかり魅せられてしまいました。ハグロトンボがよく見られるのはお盆の時期で、あたかも精霊の化身であるような本種に出会うと、先祖の魂が乗り移って現われたと感じるのでしよう。

ヤンマや他のトンボのように活発に飛翔することもホバリングすることはなく、蝶のようにゆつたりと飛び、休む時も翅を縦に畳んで止まる姿は神々しく、清流を好むことを含め自然豊かな高尾に似合うトンボだと思います。

(文松島 孝 撮影 上村 雅昭)

◆ 休載のお知らせ

波多野重雄先生による連載「折り折りの記」は、都合により休載とさせていただきます。

◆ お知らせ

高尾山薬王院では、新型コロナウイルスの感染予防を図る為、境内各所への消毒液設置・換気・職員のマスク着用などの対策を実施しております。御来山の皆さまにおかれましても、手洗いや咳エチケット等の予防対策情報に十分留意されますようお願い申し上げます。

高尾山薬王院ホームページ
<https://www.takaosan.or.jp>

下記のQRコードから高尾山薬王院のホームページにアクセスできます



発行所
東京都八王子市高尾町2177
大 本 山
高尾山薬王院
郵便番号 193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人 菅 谷 秀 文
編集人 菅 井 倫 浩
印刷 ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円